慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	観光研究におけるD.ブーアスティンの再定式化 : 「本物の」観光をめぐって
Sub Title	Re-formulating D. Boorstin in tourism research : on 'authentic' tourism
Author	高岡, 文章(Takaoka, Fumiaki)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2001
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要:社会学心理学教育学 (Studies in sociology,
	psychology and education). No.53 (2001.) ,p.69- 78
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000053-0069

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

観光研究における D. ブーアスティンの再定式化

----「本物の | 観光をめぐって----

Re-formulating D. Boorstin in tourism research

—On 'authentic' tourism—

高 岡 文 章*

Fumiaki Takaoka

The name of D. Boorstin is well-known in tourism research, and he is thought to be one of pioneers in this fields. But many researchers despise or neglect him because they consider he is now out of fashion. We think this is unfortunate not only for Boorstin but for tourism research because such appreciation has prevented us from examining Boorstin's argument and drawing rich suggestions out of it. The purpose of this paper is rethinking him and critiques for him. To be sure, Boorstin is not a specialist on tourism, or does not theorize it enough. He, however, is the first person who regards tourism as a significant phenomenon in modern society and, even now, he can give us fruitful suggestions. This paper prove it by re-examining his concept, 'authenticity' and 'perplexity'. Through this, what current tourism research has overpassed will be clear.

1. はじめに

本稿の課題は観光研究の嚆矢と位置づけられている D・ブーアスティンの観光論を再検討することである。 歴史学やメディア論の分野でわずかにその名が知られているに過ぎないブーアスティンだが、観光研究の領域においては彼を知らない研究者は皆無であり、その名に言及することなく観光研究史について語ることは不可能である。

ところがブーアスティンが観光研究において果たしてきた役割はあくまでも反面教師的なものにとどまる。彼の名が言及されるのはブーアスティン以降の観光研究がいかにブーアスティンとは逆の方向へと進んできたのかを示す場合のみであり、ブーアスティンを批判することこそが観光研究の一つの出発点であった。これらの研究はブーアスティンの議論の欠点を指摘することには熱心であり、事実そこに孕まれていた幾つかの限界を乗り越えることでさらに発展してきたと言える。しかし、ブーアスティン批判という傾向が観光研究の中で固定化して

しまった結果、彼の議論に正面から対峙し、そこで提示 された問題の射程について考察するということは充分に なされて来なかった。

本稿の作業を通じてわれわれは以下の三つの事柄を明らかにするつもりである。まずはブーアスティン批判の幾つかは彼に対する一面的な理解や誤読に起因する不本来の意味で批判的であったのだろうかということが検討されるべきであろう。次にブーアスティンの議論における幾つかの部分には確かに不十分な点が認められるが、そのことをもって彼の全てを棄却するのは明らかにであり、ブーアスティン再読を通じてわれわれは今でも観光研究に対する示唆をそこから汲み取ることができるということ。最後にブーアスティン批判という趨勢のできるということ。言い換えるならば、観光研究はブーアスティンを批判し続けることで何かを欠落させてきたということである。

2. 観光研究の歴史とブーアスティン

観光が初めて学問的研究の対象となったのは 1920 年

^{*} 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程 (観光研究)

代から30年代にかけてのことである。ヨーロッパの観 光地国であるドイツやスイス, イタリアなどにおいて観 光収益の増大という経済的要請に応じるために、観光資 源開発や産業の管理,経営手法などが主に経済学的な視 点から探求された。しかしこの時期の研究は観光産業に おけるフローを客観的に分析したに過ぎず、観光という 現代的事象が孕む問題性について批判的に考察するとい う視点を著しく欠いていた。第二次世界大戦以降、特に 50年代になるとヨーロッパ各国も戦後の混乱からよう やく立ち直り、戦争によって荒廃した国土の復興が一段 落し始める。旅行会社によるパックツアーや旅行案内書 などによる観光の大衆化はすでに19世紀に見られる現 象であるが、アメリカを中心とした消費社会の爛熟や ジャンボジェット機の登場、テレビなどのコミュニケー ションメディアの発達といった社会的変化がこの傾向を 加速させ、世界の観光者数は飛躍的に増大していったり。 観光はもはや,経済的観点のみならず社会的・文化的・ 政治的観点からも看過しえない事象へと変貌しつつあっ

にもかかわらず研究者の間では観光は一貫して重要な研究対象とは見なされてこなかった。労働や経済,政治などに関心を寄せてきた社会科学者たちにとって余暇活動である観光は取るに足らないテーマであると思われてきたし(Urry,1990=1995),未開社会の伝統文化を調査してきた人類学者たちにとって余りに近代的で表層的な観光は調査対象とは成り得なかった(石森,1996;山下,1996;橋本,1999)。そのため観光を研究する者は例外なく「観光を研究することに果たしてどのような意義があるのだろうか」という自己言及的な問いをつねに自らに課さねばならなかった。観光研究の歴史は観光研究が自らの存在を証明する過程であったと言ってもよい。

このような状況のもとで通説に反して観光が実は社会的に重要な現象であることを初めて明らかにし、その今日性と問題点を鮮やかに照らし出したのがアメリカの歴史家 D・ブーアスティンである。彼は多くの研究者にとっては未だに取るに足らない現象に過ぎなかった観光の中に初めて現代的な問題性を見出し、分析の俎上にのぼした。日本ではまだ海外旅行が自由化されていなかった1960年代初頭のことである。彼の議論は当初は充分に受容はされなかったが、やがて1970年代に入るとマッカネルやコーエンなどの後続の研究者によって批判的に検討され始め、彼らはブーアスティンの限界を乗り越えるべく自らの理論構築を試みていった。これと並行

するように観光は次第に研究対象として認知されるよう になり、特に人類学においては1974年に国際学会で始 めて取り上げられ2,以後も学界における主要なテーマ として研究が進んでいる。その他にも経済学や地理学を 中心に心理学、歴史学、社会学など多様な分野で調査研 究がなされると同時にこれらの諸学を横断する観光学が 提唱されるなど (塩田・長谷 (編), 1994; 岡本 (編), 2001), 観光は徐々にではあるが研究に値する, あるい は研究する必要のある重要な社会現象と見なされるよう になってきている。このように観光研究の歴史を見渡す とき、ブーアスティンの先見性は誰の目にも明らかであ ろう。アーリは観光には非観光的行為つまり日常的な体 験やその背景にある社会構造の諸相を解明する可能性が あるのだと述べているが (Urry, 1990=1995: 4), その ような可能性について初めて言及し実際に探求を進めた のがブーアスティンなのである。

3. ブーアスティンの観光論

3.1. 経歴

ここでブーアスティンの観光論へと立ち入る前に彼の 経歴について簡単に触れておこう。1914年アメリカの ジョージア州で法律家の子として生まれ、16歳になら ないうちにハーバード大学に入学、イギリス史およびイ ギリス文学を専攻し優秀な成績で卒業する。その後イギ リスへと渡り法律学の学位を得るかたわらアメリカ史に 興味を持ち始め研究を進める。アメリカに戻った後は大 学で法制史やイギリス史およびアメリカ史について講義 をし、1944年にシカゴ大学の教授に就任した後はアメ リカ史を専門として研究を続け、晩年はスミソニアン協 会の国立歴史技術博物館の館長や連邦議会図書館館長な どの要職を務めた。歴史を論じる際に政治体制や支配者 の変遷といった巨視的な観点をとらず、あくまでも民衆 レベルの生活経験の変容やテクノロジーの進化に着目し てアメリカの文化史、社会史をつぶさに記述したことで アメリカ歴史学に新たな局面を開いた。一方で60年代 から盛んになったマイノリティ運動に対する言及が少な いことなどから保守主義史学派との位置付けをされてい る。専門的研究にとどまらず数々の講演やエッセー執筆 など活動は極めて旺盛で、興味関心は多岐にわたり、お よそあらゆることを議論の俎上にのぼした。観光につい て言及したのもその一環であり、彼の仕事全体からすれ ばほんの一部に過ぎない。自らの名前が観光研究の分野 でこれほどまでに取りざたされるようになるとは彼自身 思いもよらないことに違いない。

3.2. 観光論の概要と背景

ブーアスティンは 1960 年に何度かに分けて行われた 講演や執筆論文をまとめた著作『The Image(幻影の時 代)』を 1962 年に出版した (Boorstin, 1962=1964)。 そ の中で彼は20世紀のアメリカにおける精神構造や生活 経験の変容について観察し、そのような変容を「疑似イ ベント (pseudo-events)」という独自の概念によって詳 細に考察した。彼によれば疑似イベントとは政治や教 育、消費生活の世界および人間関係における合成的で新 奇な出来事や経験のことで、それらはアメリカ社会を中 心にして20世紀になって初めて見出されるものであ る。「余が情況を作るのだ」というナポレオンの言葉はか つては単なる大言壮語に過ぎなかったが、20世紀のア メリカでは誰もが現実を創造している。新聞記者はもは やニュースを取材するのではなくニュースを製造するの である。かつて人は英雄であるが故に有名人でもあった が、今日では有名人こそが英雄なのである3。体験の創 造、現実の加工、出来事の大量生産は現代社会における 象徴的な要素である。そしてこのような創造された体 験、加工された現実こそが疑似イベントなのである。

このような疑似イベントが蔓延するようになったのは 果たして何故なのだろうか。このような問いに即答する ことに対してブーアスティンは極めて慎重である。確か に複製技術(グラフィック)革命についての度重なる言 及は、それがあたかも疑似イベントの直接的な原因であ るかのように思わせはする。しかし「疑似イベントの起 源と増大を十分に説明しようとすれば、近代アメリカの 歴史そのものを説明するのと同じことになってしまう」 (Boorstin, 1962=1964: 20) と述べるように彼はそれが 一元的に説明可能であるかのように単純に思い込むこと に対して注意を促している。われわれの問題は「われわ れの困惑に対して責任があるといわれている悪漢たち」 によって引き起こされたものではなく、われわれ自身が 率先して行う日々の行為によって構造的に生産/再生産 されているのである。したがって彼の論調における力点 は疑似イベントの起源ではなく疑似イベントそのものの 記述へ置かれることになる。「私はこの本のなかで、読者 に幻影の代表的見本を提供しようと試みた」(Boorstin, 1962=1964: 5)。そのことでブーアスティンは現実とイ メージ、オリジナルとコピーといった旧来の区別が転倒 したり両者の境目が氷解するという(後にドゥボールや ボードリヤールらによって広範に省察された) 事態にい ち早く注目し、そのような事態に対するわれわれ自身の 洞察力を促そうとしたのである。

製造されるニュースや有名人と並んで彼が「幻影の代 表的見本」として選んだのが観光である。その観光論の 骨子は「旅行者から観光客へ: 失われた旅行術」という 章のタイトルに端的に表されている。彼によれば旅行の 最も古い動機の一つは未知のものを見ることだった。め ずらしいものを見ることで想像力を刺激された人間は、 より情熱的な欲求を持ち、より速くより広く思考するよ うになり、新たな時代を切り拓いていった⁴。しかし今 日、アメリカ人は歴史上のいかなる国民と比べても最も たくさん旅行したことのある国民となったが,旅行は彼 らの思考や感じ方にわずかな変化しか与えなかった。な ぜか。鉄道やガイドブック、ガイドつき団体旅行が登場 した 19 世紀半ば過ぎ頃から旅行経験が変質したからで ある。このような変化は一言でいうならば旅行者(traveler) の没落、 観光客 (tourist) の台頭である。 旅行者は 能動的だったが、観光客は受身である。かつて旅行は一 つの活動、経験、仕事であった。進んで困難に打ち向か おうとしたがゆえに、旅行経験は冒険であった⁵。外国旅 行はまじめな目的を持った人か、少なくとも一生懸命に 遊ぼうとした人だけに限られた。それに対して観光はも はや商品である。ひとまとめにして割引で買うこともで きるし、分割払いもできる。旅行はもはや個々の注文に 応じて作られるものではなくて、流れ作業によって作ら れ、どの店でも買えるようになってしまった。現代の観 光客は移動中には飛行機や列車や車の中に隔離され、移 動先では近代的なホテルの中に隔離されている。窓から 見える景色を別にすれば、滞在客は自分がどこにいるの か知ることができない。彼らは同様に観光地の文化から も隔離されている。今日では、観光客は外国そのものを 見るのではなくて、そこにある観光客用に作られたもの の方を見ているにすぎない。観光地にあるのは自然発生 的な文化の産物ではなく、観光客用に、すなわち観光客 の財布を狙うために特別に作られた産物だけである。彼 らが見ているものは文化的蜃気楼であり、ミイラであ り、文化の最も稀薄化された形式に過ぎない。

3.3. 反響

以上がブーアスティンの観光論の概要である。観光論とは言うものの彼は観光そのものについて考察しているのではなく、あくまでも疑似イベントの典型的な例として観光を引き合いに出しているに過ぎない。彼の筆致からはそもそも観光を科学的に分析したり、観光に関する理論を構築するといった意図を見出すことは難しい。しかし疑似イベントの典型として観光を着想したことに

よって、幸か不幸か結果的に彼はその名を観光研究の歴史にとどめることになった。先述の通りブーアスティンが観光について論じた当時、観光は重要な現象とも意味のある研究対象とも見なされていなかったため、彼の著作は後の研究者によって観光に関する最も初期の論考と見なされるようになったのである。

しかし現状に対してあまりにも悲観的なブーアスティンの態度は痛烈な批判にさらされてきた。その先陣をきったのはマッカネルである (MacCannell, 1976)。彼はブーアスティンに対して観光研究の先駆者であると一方では評価しながらも、結局は「観光者の態度と知識人の態度を完全に分けようとすることに固執している」に過ぎず「彼が提起した問題点から目をそらし、過ぎ去りし旅行のあり方」へのノスタルジーや「自分以外の観光者に対する憎悪とも言うべき嫌悪感」を表明するだけであると批判した。ブーアスティンの議論は実証的な根拠に基づいた科学的分析とは言えず、観光者をあざ笑うことで自身の知的な優雅さを誇示するのみであるという。

続いて観光者⁶を精密に類型化したコーエンは、ブーアスティンの観光者像はあまりにも一面的でおおざっぱであると批判した (Cohen, 1996a [1979])。現実には多様な観光者が異なる様式の旅行体験を求めているのであって、類型としての観光者一般というものは存在しないという。また彼は観光地の文化が観光者の期待に沿うように構成され、その自律性を失っていくとブーアスティンが述べたような事態が実際に広がっていることを認めながらも、そのような文化の商品化批判は観光が瀕死の民俗芸術の保存や新しい芸術の発展に一役買っていることを見逃しがちであると指摘した (Cohen, 1996b [1984])。慣習や芸術に対して観光がもたらす変化を異常事態としてではなく、継続的な文化変容のプロセスとして捉えるべきであるという。

白幡はブーアスティンの議論には「人類にとってよきものだった『旅⁷』が、悪しき『旅行』に駆逐されてきたという嘆きばかりが目につく」とし、このような知識人による大衆観光批判は観光への大衆の参入に対する貴族・エリート層の憂い以上のものではないと断じている(白幡、1996)。白幡のひとかたならぬ憤りはやがて、ブーアスティン個人に対する批判を超えて知識や思想一般に対する不信へと導かれていく。「空虚な観念論」を排するためには、実際に自分自身で体験し、この目で、この肌で確かめ、「実証」することが重要なのだと彼は説く。「頭で考えた中空の理論から生れる言葉に惑わされず、とにかく旅行しよう」というのが彼の結論である。

その著作は『旅行ノススメ』と題されている。

吉見が大衆観光の誕生について論じた時、その論文にはブーアスティンを明らかに意識させる形で「疑似イベント論を超えて」という副題が付けられた(吉見、1996)。吉見は「ブーアスティンの観光=疑似イベント論は、すでに30年以上も前のものではあるが、今日なお有効な多くの示唆を含んでいる」と述べる。ところが不思議なことに「多くの示唆」については言及されることはない。彼の関心はブーアスティンの議論を吟味することではなく「超える」ことにあるからであろう。「彼の視点に内包されるさまざまな限界もこれまでくり返し指摘されてきた」として、吉見もそれをくり返すのである。

このようなブーアスティンに対する批判的論調のバリエーションは、数ある観光論の中からいくらでも引き出すことができるし、多くの研究者は自らの観光研究がブーアスティンのそれとは異なることを何よりもまず先に言明してきた。ところがブーアスティンには「マッカネルに批判された古臭い議論」という固定化した評価がまとわりついたために、彼の議論そのものを検討するという試みはほとんどなされてこなかった。このことはブーアスティンのみならず観光研究にとっても不幸であった。なぜならばそのことによって観光研究はブーアスティンと対峙する機会をほとんど取り逃し、彼の議論が持ちえた可能性について顧慮できずにきたからである。

4. ブーアスティン批判の検討

観光研究においてなされてきた数々のブーアスティン 批判はブーアスティンが提起した問題の射程にどの程度 届きえているのか。批判するという作業は単なる否定や 非難、誹謗中傷、歪曲でない。対象とする議論がなぜそ のように認識へと達しているのかを内在的に理解し、そ の地点から限界を指摘して見せることであろう。ブーア スティン批判は真の意味でどこまで「批判的」足りえて いるのかが問われるべきである。ここではブーアスティ ンに対して寄せられた数々の論難のうち幾つかの代表的 なものについてその背景を辿りながら検討していく。

吉見はブーアスティンの理論に対しては少なくとも二つの批判が可能であるという。一つ目は「旅行がエキゾティックな風景をアリバイ的に消費する経験として仕組まれていったのは、本当にどこまで複製技術革命の結果だったのか」という点であるという。吉見によればブーアスティンは旅行の変質の原因を複製技術革命に一元化させており、そのためその他の複雑な社会関係による影

響を見落としているという。吉見のブーアスティン理解 は例えば彼がブーアスティンの疑似イベントという概念 を「複製技術、とりわけマス・メディアによって製造さ れる『事実』のこと」と説明するくだりに伺えよう。吉 見に限らずブーアスティンの疑似イベント論をメディア の一方的な影響の所作として捉える研究者は決して少な くはない。「The Image」の邦訳者が「幻影の時代」とい う邦題の脇に「マスコミが製造する事実」という副題を 添えていることが影響しているのかもしれない8。しか しこのような理解は誤解に過ぎないのではないか。とい うのも、確かにブーアスティンは旅行の性格が変わり始 めたのは「複製技術 (graphic) 革命が進行し始めた十九 世紀なかば過ぎ頃から」であるとは言っているが、複製 技術革命をその原因と規定はしていない。彼によれば旅 行の変質をもたらした最初の、そして最も明白な条件は 「交通機関の進歩9」であり、「ガイドつき旅行」であり、 「国際的なホテルのチェーン」であり,「近代の観光案内 書」であり、「旅行の民主化、旅行費用の低下、組織の増 大」であり、「観光アトラクションの発達」である。ブー アスティンが疑似イベントにおける複製技術革命の影響 の重要性を認めながらも「疑似イベントの起源と増大を 十分に説明しようとすれば、近代アメリカ史そのものを 説明するのと同じことになってしまう」として他の要因 への注意を促していることは先述した通りである。「こ れは、この本のような小さな本で扱うには大きすぎる問 題である。しかし、それは大きな本で扱うにしても大き すぎる問題である」と彼が冒頭で述べているのはこのた めである。彼は疑似イベントをマスメディアや戦略家に よる一方的な押し付けと捉えるのではなく、社会構造の 必然的帰結と見なしているわけである。つまりそれは 「扇動政治家やペてん師が陰謀や悪意をもって作り出し たもの | ではなく、「善意ある人々の日々の働きの産物 | なのである。「われわれの社会のあらゆる機構の働きが、 疑似イベントの能率的な大量生産を可能にしている」と も言っている。もちろんブーアスティンは「社会のあら ゆる機構の働き」の内実を明確化させてはいなし、分析 もしておらず、ましてや理論化の作業も行っていない。 その意味において彼は分析者というよりは単に歴史を記 述するだけの立場にとどまっているという評価はなされ てしかるべきではあるが、少なくともここでなされてい るような批判は的外れなものに過ぎないと結論づけられ よう。

吉見による二つ目の批判点はブーアスティンが「19 世紀前半までの欧米にはまだ自発的で豊かな、本当の旅 が存在していたと考えている点」である。ブーアスティ ンは「19世紀半ば以降の観光の発展を,こうした輝かし い発見の歴史からの堕落としてとらえている」のだが、 以前の旅と現在の観光の間にあるのは「本当は断絶では なく連続性なのではないだろうか」と吉見は言う。「旅行 システムの変容を、 ブーアスティンのように 『本当の』 経験から『偽物の』経験への堕落と考えるのではなく、 旅行者の身体や現実感の変化の問題として深く洞察して いくこと」が必要であるという。 彼は現実/疑似イベン トというブーアスティン的な二項対立では「19世紀の 都市が開示した新たな消費の世界」における空間経験、 つまり博覧会や百貨店, 鉄道旅行, 遊園地などが可能に した新しい「パノラマ的知覚」を捉えることができない としている。そこでは本物と偽物、オリジナルとコピー の区別があいまいになっているからである。しかしブー アスティンはそのような事態を知らないわけでもない し、目を閉ざしているわけでもない。彼は「イメージ、 すなわち巧みにこしあげられた模倣品のほうが、原物よ りももっと美しく輝く」 という 「身体や現実感の変化」 に十分意識的である。「われわれの意識に押しよせてく る疑似イベントは、昔ふうの意味では本物でもなければ 偽物でもない」という記述からはオリジナルとコピーの 区別のあいまいさに対する彼なりの配慮を読み取ること もできる。このような傾向の不可避性についても「今日、 旅行の冒険が人工的・虚構的・非現実的性格を持つのは いたしかたない」、「退屈な旅行体験のみが、正真正銘の ように見える」と述べる。ブーアスティンはこのような 「身体や現実感の変化」について知っている。その上でそ れを問題化しているのであって、吉見が指摘している事 態はブーアスティンにとっては前提であり議論の出発点 に過ぎない。そのような批判はブーアスティンが現状 「認識」に基づいて現状を「評価」していることを読み落 としているため、彼自身とその批判対象であるブーアス ティンの間に、現状「認識」においてはそれほど差が存 在しないという事実を看取できないでいる。両者を隔て ているのは現状における商品化・大衆化・民主化という 過程に対する「評価」や「立場」の違いにほかならない。

マッカネルや白幡はブーアスティンの貴族主義, エリート主義について批判している。確かにブーアスティンの知的経歴は華々しくまさにエリート知識人という呼称がふさわしい。しかしだからといって彼はマッカネルが言うように稀薄化された経験をのみ求める大衆的観光者と, 本物の文化を知り豊かな精神的生活を享受する知識人たる自分自身とを区別して, 高い場所から前者を侮

蔑しているわけではない。ブーアスティンは述べてい る。「私が二十世紀のアメリカに発見した傾向や欠陥は、 すべて私自身の傾向であり欠陥である」と。彼が展開し た議論は「私自身の経験、私がほとんどすべての他のア メリカ人と分かち合っている経験に基づいたものであ る」。にもかかわらずブーアスティンが批判され続ける のは、彼が用いる記述スタイルに起因するところが大き いのではないだろうか。疑似イベントの蔓延や旅行の民 主化に対する共感と反発が絡み合った複雑な彼の態度は その文体を自然とアイロニカルなものにしており、また 問題点を強調する際に彼は事態を大げさに戯画化したり 不当に物事を一般化する。一見すると無謀にも見えるそ のような手続きの中に何を見出すのかがまさに読み手の 側に問われているのだが、批判者たちの理解はきわめて 一面的なものに終始している。ブーアスティンは結果と して「保守主義史学派」10 と位置付けられ、単に倫理的 判断を強調するだけの古臭い議論に終わっていると批判 される。

コーエンによる批判は一定の妥当性を持ちえている。 彼が指摘するように、ブーアスティンは歪められた旅行 体験や受動的な観光者といった概念を不当に一般化して いる。コーエンによれば、マッカネルが若いポスト・モ ダン観光者を不用意に一般化したのと同様に, 観光につ いて語る際のブーアスティンは落ち着いた中流階級の中 年観光者を主に想定していた。ブーアスティンによる旅 行者/観光者という区別が観光の類型学的研究の出発点 となりその後の流れに大きな影響を与えたという佐々木 (佐々木, 2000: 277) のような評価は正しいとしても, 単純な二項図式では現実の多様な観光者の多様な動機や 経験を分析し得ない。ブーアスティンの類型や議論の粗 雑さはコーエンや佐々木によるそれと比較したときいっ そう顕著なものとして浮かび上がるであろう。このよう な批判は確かに正しい。正しいが一方では不毛でもあ る。歴史家がエピソードとして言及した事柄や概念につ いて、それが科学的分析に基づいていないとか類型的に 粗雑であると批判しても歴史家の耳には届かないだろ う。ブーアスティンは著作のあとがきにおいて「この本 を書くにあたって私は、歴史家として事実を尊重する態 度と、細かい点がもっている重要性に対する洞察力とを 一身のうちに巧みに結合させているハロルド・D・ウッ ドマンの貴重な援助を受けた」(Boorstin, 1962=1964: 317) と述べている。 彼が重視しているのは現実の冷静 な把握と「細かい点がもっている重要性に対する洞察 力」を両立させることであり、いずれか一方に偏ること

ではない。確かに彼が想定している観光者像は類型学的には素朴に過ぎようし過度に単純化されたものかもしれない。しかしそのような(類型学的には一部にすぎない)ステレオタイプの中に凝縮された現代社会の問題性を浮き彫りにすることこそが彼の狙いなのである。

コーエンによる二つ目の批判は重要である。ブーアス ティンは観光者が観光地で出会う文化は「人工的製品」 であり「文化的蜃気楼」であり「観光客の財布を狙うた めにとくに作られた産物」であると述べた。ブーアス ティンはあくまでも観光者にとっての観光地文化につい て語ったのだがコーエンは視点を反転させ、それを観光 地社会における文化の問題として捉え直す。彼によれば ブーアスティンの議論は観光を慣習や芸術を堕落させ破 壊し「偽物の民俗文化」を創出するものとしてのみ捉え るため、観光が瀕死の民俗芸術の保存や新しい芸術の発 展に一役買っていることを見逃しがちである。観光地の 文化に観光がもたらす変化は、継続的な文化変容のプロ セスとして捉えるべきであるという。このような議論は 1970年から80年代以降に人類学や哲学・思想上に起 こった視点の転換と明らかに共振的であり、その説得力 も多くの人類学的調査によって強化されている。例えば 石森は「観光のグローバル化にともなって、観光化の影 響を受けない民族は存在しなくなるとともに、観光がむ しろ新しい民族文化や新しいエスニシティを生み出す重 要なきっかけになる時代が現出しはじめている」(石森、 1996: 24) と述べている。山下も観光が作り出すみやげ 用の工芸品や文化ショーは「しばしば模造品であって、 本物性を欠いたものだと考えられがちである。だが、は たしてそうなのか」という疑問を呈し、「トラジャではト ンコナンと呼ばれる独特のかたちをした慣習家屋のミニ アチュア模型がおみやげとして売られているが、これを 買っていくのは観光客ばかりではない。都市へ出稼ぎに 出たトラジャの人びとが里帰りしたときに、買って帰る のである。模造のトンコナンは都市へ移住したトラジャ の人びとの居間に置かれ、彼らのアイデンティティを証 すことにもなるのだ」という事例を紹介している(山下, 1996)。 同様に山中はハワイの観光用ダンスが逆に古典 的様式の復活を促し先住民側が自分の文化を表現するよ うになった事例を紹介し(山中、1999)、太田は観光地 の人々は単に観光者の要求に迎合的であるのではなく観 光を通じて自らのアイデンティティを模索するのだと主 張している(太田、1998)。また地理学者のアーリはイ ギリスにおいて観光産業は歴史的遺産や自然の保存に とって重要な位置を占めていると述べている (Urry,

1990=1995)。山下は以上のような議論に関して「こう した現象のなかに私たちが見るべきことは、現代におい て『伝統文化』が消滅していくという物語ではない。そ うではなくて、文化が境界を越えて享受され、古い伝統 が新しい時代に適応し、そこに新しい文化が生成してく るという事実である」と総括する。ここに見られるのは、 ホブズボウムの名と結びつくような文化概念の問い直し の動きである。山下によれば「伝統文化が破壊される」 式の語り方は伝統文化というものを太古から連綿とつた わってきた本源的な実体として理想化するという誤りを 犯しているのであって、「エリック・ホブズボームらが 示したように『伝統』は多くの場合近代の『発明』―と いってよくなければ、『再構築』といってもよいのだが一 であって、伝統文化が近代西洋文明の影響のもとに変容 したとする『文化変容』モデルではこうした文化のダイ ナミズムを説明できない」という。しかしこのような議 論をホブズボウムを持ち出して語ることにはより細心の 注意が必要であろう。多くの論者がそう期待しているの とは裏腹に、ホブズボウムは必ずしも本源的な「伝統文 化」の存在を否定しているわけではない。彼が述べてい るのはあくまでも儀礼的で象徴的なページェントがナ ショナリズムと結びつく形で 19 世紀後半から 20 世紀 初頭に多く創出されたということに過ぎず、文化や伝統 のすべてが近代の所産であるというようなことではない (Hobsbawm and Ranger, 1983=1992; 9-28)。 じじつ 彼は「慣習 (custom)」や「因襲 (convention)」や「日常 慣例 (routine)」といった概念を「創られた伝統」とは峻 別している11。 ホブズボウム解釈はさておきここで確認 しておくべきは、ホブズボウムがたいてい山下が読むよ うに読まれたということ、つまり言い換えるならば人類 学者を中心として従来の文化概念への強い反省が起こっ たということであろう。「最初の調査を終え、資料を検討 していくうちに、トラジャにやってくる観光客に目を閉 ざして彼ら(トラジャ)の伝統文化をとらえることは間 違っているのではないかと考えるようになった。『純粋 な伝統文化』 などというのは虚構でしかないのだ」(山 下, 1996: 7) と山下は述べている。このような議論は ブーアスティンに対する一つの批判足りえていると言え るだろう。確かにブーアスティンの硬直した文化観では 人類学者たちが主に明らかにしたような観光におけるホ ストとゲストのダイナミックな相互作用過程を把握し切 れない。固定的で静態的なものではなく交流的で動態的 なものとして文化を把握するという人類学における文化 観の転換は、1970年代半ば (日本では 1990年代) 以降 に人類学が観光へと着目する過程と連動してる。と言うよりもむしろ、文化をそのようにダイナミックな相互作用過程として捉える限りにおいて、相互作用における主要な要素である観光は人類学にとってもはや無視することのできないものになっているのである。このような「観光人類学の誕生」(山下、1996)以降では、ブーアスティンの持っているような文化観は人類学者にかつて調査地として「観光客がこない村」ばかりを選んでいた自分たちの姿を思い出させる忌々しいものでしかない。逆に言えば観光人類学はブーアスティン批判を起点として展開してきたのである。

しかしブーアスティンの議論では観光が文化を活性化するという状況を捉えきれないのと対照的に、他方でそのような「観光文化」「観光芸術」を賞賛する議論は開発途上国における観光開発が先進国資本で行われるという「新・植民地主義」「新・帝国主義」的状況(石森、1996; Urry、1990=1995)や、ブーアスティンが記述したように観光者の経験が技術や資本主義のシステムに絡め取られているという状況に対して何の言及も行わないだけでなく、そのような状況を隠蔽することにむしろ積極的に加担するのである。

5. ブーアスティン再考の今日的意義

われわれがブーアスティン批判を再検討してきたのは 何も彼の名誉を不当な批判から擁護する目的のためでは ない。そのような批判が硬直化してしまったためにブー アスティンの議論を再考するという機会を観光研究が失 してきたことを示すためである。それらの批判はブーア スティンの可能性はおろか,実はその限界についてすら 本質的には考察できないできた。ここでは本稿を結論づ けるために今日われわれが改めてブーアスティンの観光 論について考察する意義について考えたい。

ブーアスティンの限界とは何なのか。そしてそれはなにゆえに生じているのだろうか。先にも述べたように第一の限界は彼が精緻な類型に基づかずに一部の観光者を一般化したことであろう。しかしこの点を限界として彼に差し向けることはある意味で不毛である。日常の生活経験の変容について詳述し、そこに表れた問題性を批判的に指摘しようとしたことでブーアスティンは歴史家が持つべき客観的視線から文明批評的な立場へと超え出てしまっている。そのことの是非は別に問いうるとしても、そのような彼の意図を考慮することなくその記述や類型に科学的分析を対置し、後者の科学性によって前者を難じようとする作業はブーアスティンが言わんとして

いる内実からわれわれを遠ざけるのみである。少なくとも彼の声を聞き取ろうとするわれわれの目的にとってはこのような限界はさして重要ではない。

第二の限界は彼が文化を本源的な実体として捉えてい ることである。確かに彼は「自然発生的な文化」「本物の 文化」「生きている文化」「正真正銘の外国文化」といっ たような、彼の批判者たちが喜んで飛びつきそうな言葉 を多用している。 彼の議論に底流部に貫かれた 「本物」 への固執は文化に対してのみではなく、人間の精神や経 験の能動性にも向けられている。そしてそのような「本 物」や「良きもの」への執着こそが彼の議論の骨子であ ると言ってよい。しかし人類学においてはもはやそのよ うな執着は断念されているし、主に人類学から起因する 哲学上の構造主義以降の文脈においてはそれらは単なる 本質主義として排される。本物の文化とは何か、本当の 旅行術とは、活気ある体験とは何か。主体性など虚構で はないのか、本当に能動的な旅行者など存在したのか。 ブーアスティンは後続の研究者のこのような詰問にさら されることになる。

ところがこのような批判が寄せられることをブーアス ティンは充分に予測していた。「私は『現実』とはなんで あるかを記述することができないので、私よりもっと学 殖の深い哲学者の同僚たちから,攻撃の好目標になる危 険を冒しているということを十分承知している。しか し、私は、今日のアメリカ的経験を支配しているものが 現実でないということを確信している」(Boorstin, 1962) =1964:5)。「危険を冒している」という彼の予感は皮肉 にも見事に的中した。彼の議論は文字通り「攻撃の好目 標」となり、批判者たちの後塵を拝し続けることになる。 しかしここでわれわれはブーアスティン自身が「十分承 知している」と語る「危険」をなにゆえに彼が冒すのか ということに注意を向けるべきだろう。「現実」とは何か を記述できないにもかかわらず今日のわれわれの経験を 「現実的でない」と裁断する彼の論法は必然的にトート ロジーであり空回りしている。しかしそのような空回り の中にわれわれは彼が「困惑 (perplexity)」(Boorstin, 1962=1964: 5) と呼ぶ感覚を見出すことができるので ある。ブーアスティンは「『現実』とはなんであるかを記 述することができない」のと同様に「困惑」の内実をも 記述しえず、それらを例えば「何かが死んでしまった」 (Boorstin, 1962=1964: 113) といった嘆息や「時には自 分が動いているのかどうかさえ, 自分で理解できない」 (Boorstin, 1962=1964: 126) といった当惑の形でしか 表現できない。ここにブーアスティンのより本質的な限 界が存在する。

では、この限界は果たしてブーアスティンのみの限界 であろうか。マッカネルは「ブーアスティンは観光者的 な態度と知識人の態度の間に完全な区別を設けようとし ている」(MacCannell, 1999 [1976]: 104) と述べるが, 先述した通りブーアスティンは決してそのような分離を 想定しているわけではない。むしろ彼の議論は彼が「ほ とんどすべての他のアメリカ人と分かち合っている経 験」に基づいているのである。ブーアスティンの困惑は 単に反動的な保守主義やエリートのノスタルジーにとど まるものでなく、数多くの旅行記や体験談に見出される ような、観光者自身が長時間のバスによる移動や駆け足 のパックツアーに対して表明してきた味気なさや物足り なさの感覚と同型的なのである。しかもそのような困惑 は近年の観光をめぐる動向において、一つの主要な役割 を占めてきてもいる。近年の動向とは1990年代以降, 先進国を中心として見られるようになったオールタナ ティヴ・ツーリズム (alternative tourism) の動きであ る。オールタナティヴ・ツーリズムとは 19 世紀に誕生 し第二次大戦後に飛躍的に拡大した大衆観光 (mass tourism) への反発から生まれ、それに代替するものとし て登場した様々な観光形態の総称であり、具体的には環 境に配慮するエコツーリズム, 農村に長期滞在し農業活 動に従事するグリーン・ツーリズム,一般のツアーでは 見ることのできない発展途上国の社会問題を観察するス タディー・ツアー, 地域住民とゲストの相互理解を重視 するソフト・ツーリズム (あるいは責任ある観光) など がある。これらの観光形態の共通点は、大衆観光のネガ として観光者の体験や主体性や意思、能動性を重んじる という特徴を有していることである。安村も指摘するよ うにこのような観光の新しい動向は大衆観光に対する批 判的な議論や分析によって導かれてきたのである(安 村, 2001)。もちろんこのようなもう一つの (alternative) 観光も、大衆観光の商品化プロセスにおける単な る差異の一種であり、観光者の「能動性」や「責任」ま でもが商品化されているに過ぎないのであるという批判 も可能ではあるが、これらの動きが従来の大衆観光の問 題点を少なからず是正してきたことは軽視すべきではな いだろう。

観光者はブーアスティンがそうであるように、「現実」や「本物」の正体を知らないしそれらが失われつづある時の「困惑」の内実を記述することもできない。これは観光者や観光を研究する者が彼と共有している限界でもある。しかし内実を記述することができないという事実

は、そのような困惑が虚妄であるとか存在しないと言う ことを意味するわけではない。これらは観光形態の変容 における主要な駆動力として機能してきたのである。

何度も繰り返しているようにブーアスティンは愚昧な 大衆とは対照的な高みに自らを位置づけているわけでは ない。彼を一貫して動機づけているのは読者に「自身の 本当の困惑をよりよく発見」させるという素朴な意図な のである。なぜなら「われわれの病を知ること、われわ れがどういう病気にかかっているかを発見することだけ が、唯一の可能な治療方法なのである」と彼は考えるか らである。従ってブーアスティンの立場は観光者の持つ 素朴でありきたりの感覚をただ再現するのみであり、そ れゆえに彼は現象を俯瞰するための分析的視座を持ちえ ていないのである。そのように考えるとわれわれはもは や多くのことをブーアスティンからは学び得ないと言え そうである。しかしながらわれわれが本稿において行っ てきたように、時として一面的な批判によって矮小化さ れた彼の議論をあらためて振り返るという作業は、主に 観光人類学において見られた観光化の過度の礼賛やその 悪影響の見くびり、あるいは「困惑」という現実の軽視 などといった誤謬からわれわれを少なからず解放するの である。

【注】

- 1 戦後の国際観光の総数は以下の通りである。1950年に 2500万人,60年に6900万人,70年に1億6000万人, 80年に2億9000万人,90年に5億人(石森,1996: 11)。
- ² その成果は (Smith (ed.), 1989=1991) に結実している。
- 3 このような有名人を彼は「人間的疑似イベント」と呼んで
- 4 例えば一五世紀におけるアメリカ大陸の発見やインド航路の発見がヨーロッパにルネサンスをもたらし、一七世紀のヨーロッパ内旅行やアメリカ、東洋への旅行が啓蒙時代をもたらしたと彼は述べる (Boorstin, 1962=1964: 91).
- 6 旅行を表す travel の語源は、骨折り・労働・苦痛などという意味を持った travail である (Boorstin, 1962=1964: 96-97)
- 6 tourist は一般には観光客と訳されることが多いが、客という語が受動性を過度に強調しすぎるため、観光研究においては観光者と訳されるのが多い。本稿でも基本的にはこれにならうが、必要に応じて観光客という語も使用する場合がある。
- 7 ふつう、travel は旅行、tourism は観光と訳されるが、白 幡の場合は前者を旅、後者を旅行と訳している。
- 8 このような副題は原書にはない。ちなみに原書の副題は 'A Guide to Pseudo-Events in America' となっている。
- 9 具体的には鉄道と汽船の進歩が挙げられている。これに は後に、自動車、大型航空機などが加えられる。
- 10 (Boorstin, 1973=1976) の邦訳書の「訳者あとがき」によればブーアスティンの史観は「南北戦争以降における

- 諸々の大衆運動、独占批判を軸にした社会改革の動き、あるいはアメリカ的生活様式を享受しえなかった黒人をはじめとする少数派や彼らの貧困の問題がほとんど分析の対象からはずされたままに終わっている」ために「1960年代に入り、いわゆる『ニューレフト』史学の抬頭とともに厳しい批判を受けて」きたという。
- 11 青木はホブズボウムの著作への解説において、この峻別が「この本の弱い部分である」としている (Hobsbawm and Ranger, 1983=1992: 475)。

【参考文献】

- Boorstin, D. J. 1962, The Image: or, What Happened to the American Dream, Atheneum.=星野郁美・後藤和彦訳1964『幻影の時代:マスコミが製造する事実』東京創元社。
- 1973 The Americans: The Democratic Experience, Random House. =新川健三郎訳 1976『アメリカ人(上): 大量消費社会の生活と文化』河出書房新社。
- Cohen, E. 1996a [1979], A Phenomenology of Tourist Experiences, In Apostolopoulos, Y. and Leivade, S. and Yiannakis, A. (eds.) 1996, The Sociology of Tourism: Theoretical and Empirical Investigations, Routledge.
- ——. 1996b [1984], The Sociology of Tourism: Approaches, issues, and findings, In Apostolopoulos, Y. and Leivade, S. and Yiannakis, A. (eds.) 1996, The Sociology of Tourism: Theoretical and Empirical Investigations, Routledge.
- 遠藤英樹 2001「観光という『イメージ』の織物」『社会学評論』 52(1): 133-146.
- 橋本和也 1999『観光人類学の戦略: 文化の売り方・売られ方』 世界思想社。
- Hobsbawm, E. and Ranger, T (eds.) 1983, *The Invention of Tradition*, The Press of University of Cambridge.=前川啓治・梶原景昭他訳 1992『創られた伝統』紀伊国屋書店。
- 稲垣 勉 2001「観光消費」岡本伸之編『観光学入門: ポスト・マス・ツーリズムの観光学』有斐閣。
- 石森秀三 1996「観光革命と二〇世紀」石森秀三編『二〇世紀に おける諸民族文化の伝統と変容 3: 観光の二〇世紀』ドメス 出版。
- MacCannell, D. 1999 [1976], The Tourist: A New Theory of the Leisure Class, University of California Press.
- 岡本伸之編 2001 『観光学入門: ポスト・マス・ツーリズムの観 光学』有斐閣。
- 大橋健一 2001 「観光と文化」岡本伸之編『観光学人門: ポスト・マス・ツーリズムの観光学』 有斐閣。
- 太田好信 1998『トランスポジションの思想:文化人類学の再想像』世界思想社。
 - ------. 2001 『民俗誌的近代への介入:文化を語る権利は誰に あるのか』人文書院。
- 佐々木土師二 2000『旅行者行動の心理学』関西大学出版部。
- Smith, V. L. (ed.) 1989, Hosts and Guests: The anthropology of tourism, University of Pennsylvania Press. = 三村浩史監訳 1991『観光・リゾート開発の人類学: ホスト&ゲスト論でみる地域文化の対応』勁草書房。
- 白幡洋三郎 1996 『旅行ノススメ: 昭和が生んだ庶民の「新文 化』』中央公論社。
- Urry, J. 1990, The Tourist Gaze: Leisure and Travel in Contemporary Societies, Sage. = 加太宏邦訳 1995 『観光のまなざし:現代社会におけるレジャーと旅行』法政大学出版局。
- 山中速人 1992『イメージの〈楽園〉:観光ハワイの文化史』筑摩

書房。

- 真幸・小森陽一・田嶋淳子・山中速人『メディア空間の変 容と多文化社会』背弓社。
- 山下晋司 1996「観光人類学案内:《文化》への新しいアプロー チ」山下晋司編『観光人類学』新曜社。
- 安村克己 1996「観光社会学の現状と課題」『社会学評論』 47(3)。
- --. 2001『社会学で読み解く観光: 新時代をつくる社会現 象』学文社。
- 吉見俊哉 1996「観光の誕生:疑似イベント論を超えて」山下晋 司編『観光人類学』新曜社。
- 吉野耕作 1994「消費社会におけるエスニシティとナショナリズ ム:日本とイギリスの「文化産業」を中心に」『社会学評論』 44(4)0